

『お金でなく、人のご縁で でっかく生きる』



主 催 郡山モラロジー事務所 サークル あさかの里
郡山市安積町荒井字上北井前1-22 代表 長澤武夫
・郡山市教育委員会・福島県モラロジー協議会後援

なかむらふみあき

■中村文昭講師 プロフィール

■昭和44年 三重県多気郡宮川村大杉谷に生まれる。■皇學館高校卒業 ■尊敬する人物 坂本龍馬

■モットー(好きな言葉)一燈照隅 ■現在 有限会社クロフネカンパニー 代表取締役

18歳の時、家出同然で単身上京、職務質問を受けた警官が友人第1号。弟のように可愛がられ、仕事・食事の世話をしてもらう内に常連となった焼き鳥屋で人生の進路に影響を受ける大物リーダーに出会う。

焼き鳥屋で出会った男性は、大きな事業構想を持ち、そのロマンに惹かれ、その場で弟子入りを決意、彼の商売(野菜の行商)を手伝い始める。将来の基盤をつくるために、毎日、300円の生活。お金を節約する熱心さに感心した農家のおばちゃんにかわいがられ、産直方式をヒットさせる。

19歳の時、行商で得た資金を元に、六本木にショットバーを開店、店を任せられる。開店前に某有名ホテルのラウンジでの修行を経験。料理長に熱意で接することで、バーのノウハウを覚えてもらう。その後、様々な方法でお客様を満足させて、5店舗まで拡張。

21歳の時、三重県に戻り伊勢市で10席のショットバー「クロフネ」オープン(1号店)。三重NO.1のお客様に喜ばれる店づくりを目標とする。お客様を徹底して喜ばせ大繁盛させる。

26歳の時、リビングカフェ「クロフネ」をオープン(2号店)。

若者が、本当に楽しく、皆に祝福されるようなレストラン・ウェディングを始め、演出を手がける。

現在は自分の経験を活かした講演活動・人材育成にも力を入れ、全国を飛び回っている。

講演会を行う一方で離農が進んだ北海道の農地をお借りして、都会でひきこもり・ニートと呼ばれる若者達と一緒に農業を行っている。(※『耕せ日本』活動の推進者 後述)

最近では小学校や中学・高校などの学校関係にも講演会で呼んでいただく機会が増え、教育現場の活性化にも強く関心を抱いている。

「出会いを生かせば道は開ける」

あなたは毎日、何気なく人と出会っていませんか？三重県山奥で林業家の息子に生まれ、高校卒業後、単身上京。1人の事業家との出会いから商売の面白さを知り、その後、自分の力でお客様に喜んでもらえるサービスを提供したいと考え、現在、伊勢市で手づくりのレストラン・ウェディングで多くの若者の支持を得て、派手な広告もせず、ほとんどクチコミだけでレストランが大繁盛しています。1つ1つの出会いを大切にすることで現在までに幅広い人脈を築いてきました。商売の全ては出会いから広がってゆくという独特のコミュニケーション、サービスはアイデア満載です。夢を持つことの大切さ、不可能を可能に変えるのは自分の心構え次第だということを押付けがましくなく、私達に気づかせてくれます。26歳で夢を実現し、現在も『人持ち人生 快走中』の中村文昭の目標発見から達成までのストーリーは、笑いあり涙ありで皆様に活力を得て頂けることは間違いありません。各方面での講演や研修に参加された経営者や若い方々から絶賛の声を戴いています。

■著書『お金でなく、人のご縁ででっかく生きる』(サンマーク出版)

『人生の師匠をつくれ!』(サンマーク出版)『出会いを生かせば、ブワッと道は開ける!』(PHP研究所)『非常識力』(PHP研究所)『僕たちの“夢のつかみ方”をすべて語ろう!』(学習研究社)など ■CD・DVDP中村文昭のみるみる元気がわいてくる(パワーの源) 『中村文昭のみるみる元気がわいてくる(出会いの種)』(サンマーク出版) 『人生の師匠をつくれDVD』(サンマーク出版)

【耕せにつぼん活動】とは

講演活動で全国を回っている中で、離農が進む農家の現状を知った。そして同じ時期、新聞やテレビで社会問題とされている引きこもりや、ニートの若者達と話をすることがあった。いろいろと話をして聞いていると、決して何事にもやる気が無いわけではない。ただ他人との競争が苦手で、社会に馴染めずにいるだけだった。離農が進み人手不足の農家さん…人と比較される事が嫌で社会に馴染めない若者達…そこで思いついた…「この子達と一緒に農業をやろう 2006年5月この活動はスタートした。北海道の広大な土地をお借りし、ぼろぼろだった家を自分達で修理し、住めるようにして開始した。

畑はあえて草がボウボウに茂った大地を機械を使わず自分達の手で耕した。周囲の農家さんの助けもあり、予想以上の立派な作物達が育ち、中村が全国で講演する先で飛ぶように売れた。

彼らが荒れた大地を耕し、その広大な大地と周囲の人々の優しさが彼らの心を耕してくれた。また彼らは自分たちの生活の費金を稼ぐため、自分のお箸(マイ箸)を持ち歩くための、箸袋作りを行っている。晴耕雨読という言葉があるが、彼らの場合は「晴耕雨ミシン」晴れの日には畑仕事をやり、雨の日には箸袋を作るため一日中ミシンに向かっている。これは割箸の大量消費によって中国の森林がドンドン減り、砂漠化が進んでいるという現実を知ったことから始まった。

去年一年間で15000本ものマイ箸を作製し、全国の心ある方に買っていただいた。そして今、少しずつマイ箸ブーム"が全国で起こっている。

この活動を始める際に、彼らの食事などのお世話役を心理カウンセラーなどの専門家ではなく、マリちゃんという女性にお願いした。実は彼女、先天性小児麻痺という病気を持つ重度の身体障害者である。手足は不自由だし言葉も上手く喋れない、でも料理の腕はピカール。そんな彼女が一生懸命料理を作ってくれるから、彼らの中に何か手伝おうという気持ちが湧いてくる。上手く言葉が出てこないから心と心を通い合わせようとする。自分の内から湧いてくる気持ち、耕せにつぼん活動では、それを一番大事にしている。畑も家も便利なものを使うのではなく、あえて不便なものを使うから愛着が湧く。北海道ではトラクターでやればおよそ一時間で耕せてしまうような上地を、丸一日かけてクリとスコップで耕した。

住居も十何年も使われておらず、少し傾いてしまっている家をみんなで掃除し住んでいる。そんな生活の不便さに初めは少し抵抗があった彼らだが、今では楽しみながらやっている。

現在5名の引きこもり・ニートだった若者が北海道で汗を流し、笑いの絶えない日々を送っている。ここでの生活を通して「やれば出来る！動けば変わる！」という事を経験した。今後はこの活動をもっと多くの方に知ってもらいたいジッセン〔実践〕ジャーとして動いてきた彼らを、今度はメッセンジャーとして以前の彼らと同じ状況に居る若者達に伝えたい。そういった若者達にとって、社会で活躍中の方々がどんな励ましを送るより、以前は部屋から一歩も出ることなく色白だった彼らが、照りつける太陽の下、畑を耕し汗を流してまっ黒になっている姿を見せる事がどんなに励みになるだろう。そして自分もちょっとやってみようかな…」と思ってもらえたら嬉しい。問題だ問題だと言われ、社会のお荷物と表現される彼らが、自分でその問題を解決し、環境問題や教育問題、食糧問題といわれるものまで楽しく笑いながら解決していく、そんなことを思い描きながら今年も北海道の大地にクワを入れる。

日時 2011年8月7日 県民の日協賛の講演会 その一

受付 12:00 開演13:00 終了15:30 (著書販売あります)

場所 ユラックス熱海

入場料 一般 2500円 前売り 2000円 学生 1000円

申込先 あさかの里 FAX024-946-9010

申込書 (ここに記載された個人情報はあさかの里での諸連絡以外には使用を致しません) 世話人氏名

ご氏名	〒	ご住所とTEL

